武田信玄漢詩校釈

島森哲男

【凡例】

○本稿は武田信玄の漢詩十七首について校訂注釈を加えたものである。漢詩十七首は『甲陽軍鑑』巻九に収められている。

○テキストは酒井憲二編著『甲陽軍鑑校注 序冊』に収める土井忠生氏所蔵写本（旧三井家蔵）の酒井憲二氏による翻刻・校訂本を底本とする。

△酒井憲二編著『甲陽軍鑑校注 序冊』（二〇一三年、勉誠出版）　略称→底本

土井忠生氏所蔵写本（旧三井家蔵、寛文・延宝頃〔一六六一～一六八〇〕の写本）を底本に、諸本を校合して酒井憲二氏が校訂。注釈を付す。土井氏蔵本は酒井氏に拠れば「系統的に見て現存写本中最古最良の善本」という。

○本稿では基本的に酒井氏校注本を底本としつつ、一部以下の諸本を参照して校訂を加えたところがある。その場合には字傍に「＊」印を付して字を改め、「△」印の校異の箇所でその旨を詳しく説明する。

○底本と校合するために参照したテキストは以下の五種である。すなわち『甲陽軍鑑』の写本一種、刊本二種、及び漢詩のみを独立させた文献一種。写本一種。（→略称）

△国立国会図書館所蔵写本『甲陽軍鑑』三五巻三五冊　→国会本

江戸中期写本（極彩色絵入）。国立国会図書館デジタル化資料。

△前田育徳会尊経閣文庫所蔵刊本『甲陽軍鑑』（一九七九年、勉誠社）　→尊経閣本

元和・寛永中〔一六一五～一六四四〕刊本（無刊記十行本）を影印。酒井憲二解題。

△磯貝正義・服部治則校注『改訂甲陽軍鑑』〔戦国史料叢書〕（一九六五年刊、七三年改訂、新人物往来社）　→磯貝本

明暦二年〔一六五六〕刊本を翻刻。書き下し文を付す。

△機山十七首（『続々群書類従』巻十三詩文部）（一九〇九年、国書刊行会）　→類従本

例言に云う「凡て十七首、信玄全集より鈔録せり」。

△西笑承兌書写「武田晴信公漢詩十七首詩巻」の転写本　→大泉寺本

原本は京都鹿苑寺の西笑承兌〔一五四八～一六〇八〕が書写したもので、現在、細川家永青文庫所蔵という〔未見〕。これを転写したものが甲府市岩窪町の大泉寺に伝存し、その写真が野澤公次郎編『原色武田遺宝集』（一九七二年、武田信玄公宝物保存会）に掲載されている。佐藤八郎による釈文・語釈を付す。後述の河住 玄著『武田信玄公の詩歌』下一八三～一八四頁に通行のテキストとこの写本との校異を載せる。

○右記六種のテキスト（△印）の他に、現代の著作で武田信玄の漢詩十七首について注釈を加えたものとして、次の三種がある。その中で文字の異同について独自の見解を示すものあり、本稿で一部その見解を踏襲するものもあるので、右五種のテキストに準じて、特にここに並べておく。

△萩原頼平著『機山公十七首詩解 全』（一九三三年、甲斐志科刊行会）　→萩原本

△河住 玄著『武田信玄公の詩歌』上下（一九八八年、欣求庵〔私家版〕）　→河住本

△荻原留則著『改訂版 機山武田信玄公の漢詩（解説）』（二〇一一年、志

村司郎〔私家版〕　　↓荻原本

○底本及び参照した各本には訓点や送り仮名が施されているが、これらは信玄自らのものでは勿論なく、恐らく後世、筆写の際に付されたもので、信玄本来の意図に即していないと目されるものもある。そこで本稿では必ずしもそれらに拠らず、独自に書き下し文を作った。

【参考文献】

A　漢詩十七首注釈

・萩原頼平著『機山公十七首詩解 全』（一九三三年、甲斐志科刊行会）

・河住 玄著『武田信玄公の詩歌』上下（一九八八年、欣求庵〔私家版〕）
　下冊一四七頁以下に漢詩十七首及び序跋の校異・語釈・通解あり。参考を付す。

・荻原留則著『改訂版 機山武田信玄公の漢詩（解説）』（二〇一一年、志村司郎〔私家版〕）
　十七首＋「偶作」一首につき、それぞれ語釈・通釈及び解説・参考あり。

B　甲陽軍鑑注釈・現代語訳

・酒井憲二編著『甲陽軍鑑校注 序冊』（二〇一三年、勉誠出版）
　漢詩十七首に簡明な注釈を付す。

・腰原哲朗訳『甲陽軍鑑』上中下（一九七九年、教育社）
　上冊二七九頁以下に漢詩十七首のうち十二首を抄訳。

C　漢詩（一部）注釈

・簡野道明著『和漢名詩類選評釈』（一九一四年、明治書院）
　「偶作」「新正口号其一」を訳注。

・内田泉之助著『新釈和漢名詩選』（一九五八年、明治書院）
　「偶作」一首を訳注。

・猪口篤志著『日本漢詩』上〔新釈漢文大系〕（一九七八年、明治書院）
　「偶作」一首を訳注。

・菅野禮行・徳田武訳注『日本漢詩集』〔新編日本古典文学全集〕（二〇〇二年、小学館）
　「新正口号其一」「春山如笑」の二首を訳注。

・石川忠久著『日本人の漢詩』（二〇〇三年、大修館書店）
　「偶作」「新正口号其一」「寄濃州僧」の三首を解説。

・林田慎之助著『漢詩のこころ 日本名作選』（二〇〇六年、講談社）
　「惜落花」「薔薇其二」「旅館聴鵑」の三首を解説。

・宇野直人著『漢詩を読む 日本の漢詩（鎌倉～江戸中期）』（二〇一一年、NHK出版）
　「新正口号其一」一首を訳注。

・長尾 剛著『サムライの漢詩』（二〇一三年、明治書院）
　「偶作」一首を解説。

D　漢詩（一部）に言及

・岡田正之著『日本漢文学史』（一九二九年、共立社書店、増訂版一九五四年、吉川弘文館）
　「新正口号其一」「春山如笑」の二首に言及。

・猪口篤志著『日本漢文学史』（一九八四年、角川書店）
　「新正口号其一」「寄濃州僧」「春山如笑」の三首に言及。

・渡邊世祐『武田信玄の經綸と修養』（一九四三年、創元社）
　「第二篇　その信仰及び文芸／第二章　その文芸／第一節　詩」（三〇〇頁以下）に詩十七首及び序跋を引用。

・笹本正治著『武田信玄』〔ミネルヴァ日本評伝選〕（二〇〇五年、ミネルヴァ書房）
　「春山如笑」「古寺看花」「新緑」の三首に言及。

・小和田哲男著『戦国大名と読書』（二〇一四年、柏書房）
　「偶作」「春山如笑」「古寺看花」「寄濃州僧」の四首に言及。

E　その他

・井上たか子『信玄和歌の世界』（一九八八年、山梨日日新聞社）

武田信玄漢詩「機山十七首」校釈

〔一〕 **新正口号**　　**新正の口号**

淑気未融春尚遅　　淑気未だ融らず　春尚お遅し
霜辛雪苦豈言詩　　霜辛雪苦　豈に詩を言わんや
此情愧被東風咲　　此の情　愧ずらくは東風に咲われん
吟断江南梅一枝　　吟断す　江南の梅一枝

▽七絶。上平声四支韻（遅・詩・枝）。
△「淑」、磯貝本作「俶（淑）」。

○**新正**　新年の正月。唐の厳維「歳初に皇甫侍御が至るを喜ぶ」（『三体詩』巻一）に「湖上の新正　故人に逢う」。　○**口号**　即興の詩。口に随い心に浮かぶままに（文字に書かずに）吟詠するという意。古くは梁の簡文帝の「仰和衛尉新渝侯巡城口号」に始まり、唐代の詩人たちが多く襲用した。李白「口号」「口号贈陽徵君」、杜甫「晩行口号」「紫宸殿退朝口号」「存歿口号」「西閣口号呈元二十一」「喜聞盗賊総退口号」など。　○**淑気**　春のおだやかな気。淑は善い、やさしいの意。晋の陸機「悲哉行」に「蕙草　淑気饒かに／時鳥好音多し」。唐の杜審言「早春の遊望」（『三体詩』巻三）に「淑気　黄鳥を催し／晴光　緑蘋に転ず」。李白「春日独酌其一」に「東風　淑気を扇し／水木春暉に栄ゆ」。　○**霜辛雪苦**　「霜雪辛苦」の互文。新春が訪れたとはいえ、山国ではまだ寒さは続き、霜や雪に苦しんでいるということ。　○**豈言詩**　詩など作る余裕がない。　○**此情愧被東風咲**　「此情」はこんな〔寒くて詩を作る余裕が無いという〕歌心を欠いた我が心。「東風」は春風。「咲」は笑う。春が来たのに寒いからと詩が作れないようでは、春風に笑われよう。なおこの「春風に笑われる」という自然の擬人化については余説二参照。　○**吟断**　吟ずる、歌う。「断」は強調の添え字で、～し尽くす、敢えて～するというニュアンス。唐の竇庠「冬夜の寓懐、王翰林に寄す」（『三体詩』巻一）に「満地の霜蕪　葉　枝を下る／幾回か吟断す　四愁詩」、同じく高蟾「旅夕」（『三体詩』巻一）に「吟断して人の見る無きに堪えず」。　○**江南梅一枝**　南朝・宋の陸凱が長安の范曄に贈った詩「梅を折りて駅使に逢い／隴頭の人に寄与す／江南有る所無し／聊か贈る一枝の春」（「荊州記」〔『太平御覧』巻九七〇引〕）。せめてその「一枝の春」ということばをたよりに、春の訪れを心待ちにすることとしよう。

《新春正月即興の詩〔その一〕》

春のおだやかな気はこの山国にはまだ行き渡らず、春はなお遅い。霜や雪に苦しめられて、新春の詩を作るなどと暢気なことが言っていられないほどだ。こんな歌心では恥かしいことに春風に笑われてしまうだろう。せめて陸凱の「梅を折りて駅使に逢い／隴頭の人に寄与す／江南有る所無し／聊か贈る一枝の春」の詩を吟じて、一枝の春の訪れを心待ちにすることとしよう。

【余説一】戦国武将の漢詩の中で、典拠のある詩句を多く用いるという点では、武田信玄が突出している。武田信玄、直江兼続、伊達政宗の三人は、他の戦国武将に比べて残っている漢詩の数が比較的多いが、それは三人とも幼少より禅僧のもとで漢詩・漢籍を学ぶという学問的蓄積があったからである。中でも詩句からうかがえる学識尤も深いのは信玄で、時に衒学的ですらある。それは信玄が学んだ禅僧たちが五山文学の影響下にあり、彼らが宋詩を重んじ、典拠を頻用することを詩づくりの一つの特徴としていることとつながりがあろう。

この詩ではさりげなく宋の陸凱の「一枝の春」の詩を引用して詩に奥行きを与えているが、こうした詩句が自然に出てくるところに信玄らしい特徴がある。

【余説二】転句の「此の情愧ずらくは東風に咲われん」という表現は、自然が人に対して笑うという擬人法的な表現になっている。それは例えば五山の詩僧 絶海中津〔一三三六～一四〇五〕の詩「扇面画に題す七首」に「月に対〔むか〕いて佳句無くんば／応に月に嗤〔わら〕わるべし」といい「琴の後ろに随う〔琴を抱えた侍童が後ろに随うような風雅〕有らずんば／青山 合〔まさ〕に人を笑うべし」という表現に影響を受けていることは明らかだろう。

信玄のこうした擬人的自然観は、「〔二〕新正の口号其の二」、「〔四〕春山笑うが如し」、「〔十四〕便面水仙梅花」などにも見えるところである。

このような自然の擬人法的捉え方は五山の詩僧たちの詩にしばしば出てくるもので、「花は相看る毎に笑いを含んで向い／鶯は問わずと雖も声を寄せて来る」（虎関師錬「春」）、

「雨は春簷に洒いで花は香りを滴らせ／声を作〔た〕てて故らに主人の牀に向かう」（絶海中津「春雨」）、「幽花は雨の頻りに催すを受けず／羞を含んで白昼に開くを怕るなるべし」（義堂周信「庭前の桜花未だ開かず、戯れに友人に答う」）など、その例は多い。

こうした擬人化された自然観は、実は五山の詩僧たちが学んだ宋詩に、特徴的に見える自然観なのである。（詳しくは小川環樹「自然は人に好意をもつか～宋詩の擬人法～」〔『風と雲　中国文学論集』所収〕及び『宋詩選』解説、吉川幸次郎『宋詩概説』序章第十二節「宋詩における自然」を参照）。それは宋の時代の、「気」を通じて自然と人間を一体のものととらえる哲学あるいは時代思潮に通底するものであるということが出来よう。それはともかく、宋詩→五山詩僧の漢詩→信玄の漢詩、という自然観のつながりがあることはここで注目しておいてよいことである。

〔二〕　又

風送鶯寒意結*加
梅辺吟履月横斜
因思香雪斎*前夜
春若有情吾約花

又

風は鶯寒を送りて　意結ぼるること加わる
梅辺の吟履　月横斜
因りて思う　香雪斎前の夜
春若し情有らば　吾　花に約せん

▽七絶。下平声六麻韻（加・斜・花）。

△「鶯」、尊経閣本、磯貝本作「鷽」。鷽は鶯の俗字。

「意結」、底本及び類従本作「意緒」、国会本、尊経閣本、大泉寺本作「意結」、磯貝本作「意結（気）」。今、内容から国会本、尊経閣本、大泉寺本に従い「意結」に改める。

「斎前」、国会本、類従本、大泉寺本、荻原本作「斎前」、底本及び他本皆作「斉前」。今、国会本、類従本、大泉寺本に従い「斎前」に改める。

○鶯寒　「鶯寒」の語、漢籍には見えないが、後述の如く日本の和歌の伝統では、鶯は氷や雪のまだ融けぬうちから啼いて春を告げる鳥とされる（→「余説一」参照）。したがって「鶯寒」とは鶯は啼くが、まだ氷も雪も融けぬころの寒さという意味あいだろう。　**○意結**　「意結ぼる」とは心屈して伸びないさま。これも日本の和歌の伝統で「うぐひす」の「うく」と「憂く」が結びつく連想が背後にあろう（→「余説一」参照）。（中国では「気結ぼる」「腸結ぼる」などの表現がある。息が詰まる、思いが屈するの意。曹植「応氏を送る其一」に「我が平常の居を念い／気結ぼれて言うこと能わず」。白居易「啄木の曲」に「解結の錐を磨く莫れ／虚しく人の気力を労せん／我に腸中の結ぼるる有り／君の解き得ざるを知る」）。なお底本は「意緒」に作る。「意緒」は心意、情緒、思い。南朝斉の王融「琵琶を詠ず」に「絲中　意緒を伝え／花裏　春情を寄す」。五代の徐鉉「柳枝の辞十二」に「唯美人有りて意緒多く／解く芳態に依りて双眉を画く」。「意緒加わる」とは、思いが深くなるということで、内容的には「意結ぼるること加わる」とほぼ同意である。　**○吟履**　詩語には見えないが、詩を詠もうとして庭などに出て土を履んで歩き回ること、あるいはその際履いている履物のことか。仏教用語には「行履」〔あんり〕という言葉があって、行住坐臥一切の行為を指す。その場合の「履」は履践の意。似た表現で「吟＋□」という熟語としては、中国では「吟行」（吟じつつ行く）という言葉があり、例えば唐の張籍「賈島に逢う」に「寺を出て吟行すれば日已に斜めなり」など。また「吟筇」「吟杖」（筇も杖の意）という言葉もあり、詩を詠む際に携える杖の意。宋の蔡正孫「魏梅墅に寄訊す」に「吟筇肯て山斎に過らんや未や／近ごろ新吟多少の詩有りや」などと見える。他に五山の詩僧の詩句に「吟鞍」（歌吟しながら跨っている鞍）「詩鞋」（詩を詠むのに歩き回る際の草鞋）などという言い方もある。南江宗沅「扇面富士」に「東関千里吟鞍の上／晴雪人を趁う三五州」。万里集九「内屋蔦」に「詩鞋踏み難し和歌の道／一葉を摘みて行巻の中に編まん」。「吟履」はそういう言葉と同じ発想で作られた言葉であろう。　**○月横斜**　月の光に梅の枝の影が横ざまに、また斜めに地上に映っている。北宋の林逋（林和靖）「山園小梅」の「疎影横斜　水清浅／暗香浮動　月黄昏」に基づく。**○香雪**　かおりのある雪、すなわち白い花の比喩。宋の蘇軾「月夜客と杏花の下に飲む」に「花間に置酒すれば清香発し／争うて長條を挽きて香雪落つ」。ここは梅の花のたとえ。宋の尤袤「落梅」に「卻って憶う　孤山酔帰の路／馬蹄の香雪　東風に襯せしを」。　**○斎前**　書斎の前。あるいは斎戒のとき居る部屋の前。『宋書』蕭惠開伝に「寺内住む所の斎前、嚮に種えし花草の甚だ美なる有り。惠開悉く剗除す」。　**○約花**　花に約束する。花と友となる。この「機山十七首」の序文（惟高妙安の作）に「凡そ詩道の興るや旧し。…風に吟じ月を弄し、花

に約し葉に媒するの徒、滔々として皆是れなり」とある。「吟風弄月約花媒葉之徒」とは詩人たちを指す。

《新春正月即興の詩〔その二〕》

春尚お遅い山国にも鶯が啼き出したが、その鶯も寒さにふるえるほどの風が吹き、私の心はまだ結ぼれたまま。梅はまだかと庭に出て梅の木の周りを歩いてみたが、月の光にさえざえと梅の枝の影が横に斜めに地上に映るばかり。雪のような真っ白な梅の花が香りゆたかに書斎の前の庭に咲きそろう夜が待ち遠しい。春にもし情があるならば、その花の咲く夜まで、今から約束をしておこう。（早く約束を果たして咲いて欲しい）。

【余説一】この詩は「風は鶯寒を送りて　意結ぼるること加わる」「春若し情有らば　吾　花に約せん」とあるところから、春が来たのにまだ寒く、梅がほころばぬのを待ちわびて、その心を歌にしたもの。「新正口号其一」と同じく、梅を待ちわびる心を歌う。（なお結句の「春若し情有らば　吾　花に約せん」も春や花を擬人化している）。

ところでこの詩の「風は鶯寒を送りて　意結ぼるること加わる」という起句の発想の背後には、察するところ、日本の和歌の伝統が生きている。

和歌の中での鶯の描かれ方には（一）「雪かかるそともの梅はおそけれどまづ春つぐるうぐひすの声」（風雅集）のように、氷や雪のまだ融けぬうちから啼いて春を告げる鳥というイメージと、（二）「春たてど花もにほはぬ山ざとはもの憂かる音に鶯ぞなく」（古今集）のように鶯の「うく」と「憂く」を掛けて、鶯の声がものうい、あるいはそれを聞く人の心がものうげになるという理解がある。これはいずれも中国の漢詩にはない連想であり、信玄の詩の背景にこうした和歌の理解があることがうかがえる。

（一）鶯と寒さ。

・雪の内に春はきにけり鶯のこほれるなみだいまやとくらむ（古今集）
・春立てば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯ぞ鳴く（古今集）
・氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯の声（拾遺集）
・うぐひすのこゑなかりせばゆききえぬやまざといかではるをしらまし（拾遺集）
・うぐひすのはかぜをさむみかすがのの霞の衣いまはたつらん（続後撰集）
・むめがえにこぞのやどとふうぐひすのはつねもさむくあはゆきぞふる（続古今集）

（二）鶯と「憂し」

・春たてど花もにほはぬ山ざとはもの憂かる音に鶯ぞなく（古今集）
・いたづらに春しらぬ身と思ふにもいまは物うき鶯のこゑ（続後拾遺集）
・うぐひすのまだものうげになくめるはけさも梢に雪やふるらん（玉葉集）

【余説二】この詩では信玄の愛した北宋の林逋（林和靖）の「山園小梅」の詩句、「疎影横斜　水清浅／暗香浮動　月黄昏」を引用している。「〔十五〕便面半月照梅花」にも同じ詩をふまえた「昏月横斜　夜ならんと欲する時／梅花秀色　臙脂に似たり」の句が見える。

このように林和靖の梅の詩を愛する傾向は、信玄が詩を作る上で手本とした五山の詩僧たちに共通する特徴で、彼らの詩には「疎影横斜　水清浅／暗香浮動　月黄昏」が形を変えてしばしば登場する。例えば絶海中津の「画梅に題す」に「孤山曽て訪う中庸子／水に照る梅花　処士の家／駅使は伝えず　南国の信／黄昏　月に和して横斜を看る」。また義堂周信「庭前に梅を接いで宛も霄を凌ぐの態有り、蓋し俗に気条と謂うものなり」の詩に「梅を愛するに何ぞ必ずしも横枝を貴ばん／千尺雲を凌ぐも也た一奇」。

【余説三】『甲陽軍鑑』品第九「信玄公御歌の会の事」には次のような一節がある。「そこにて信玄公、寺島甫庵を召して、円光寺雪山和尚へ行きて、宋梅洞の噂は何の本にあるやらん。尋ねて書付け持ち来れ、と御申しあり、甫庵を円光寺へさし遣はさるゝ。」と。ここに言う「宋梅洞」とは宋の林和靖のことで、その噂とは、梅をめぐる「梅妻鶴子」などのエピソードのことであろう。信玄が林和靖に特別の関心を持っていたことが分かる一節である。（もっともこれは裏の事情を言えば「御歌の会」に突然予定しない参会者があり、人数合わせのために、一人削る必要があったので、寺島甫庵にわざと用事を言い付け、他へ遣わしたに過ぎず、質問はその口実であった）。

〔三〕**鳥語花中管絃**

飛入繁花奏管絃
提壺勧酒共留連
新翻一曲芳春調
数囀黄鶯古寺前

鳥語は花中の管絃

飛んで繁花に入りて　管絃を奏す
壺を提げ〔又は提壺〕酒を勧めて　共に留連す
新たに一曲を翻す　芳春の調べ
数囀の黄鶯　古寺の前

▽七絶。下平声一先韻（弦・連・前）。
△「勧」、類従本作「勤」、誤也。「翻」、国会本、尊経閣本、磯貝本、類従本、大泉寺本作「飜」。「翻」「飜」通用。

○鳥語　鳥の鳴き声。梁の蕭子範「春望古意」に「春情　柳色に寄せ／鳥語　梅中に出ず」。　**○管絃**　管絃楽、音楽。唐の崔湜「春日幸して春宮を望むに奉和す」に「庭際に花飛んで錦繡合し／枝間に鳥囀りて管絃に同じ」。**○繁花**　咲き乱れる花。唐の盧綸「早春　盩厔に帰りて耿湋・李端に寄す」（『三体詩』巻二）に「万家の廃井　新草を生じ／一樹の繁花　古墳に対す」。同じく李商隠「馬郎中の白菊を移し示さるるに和す」に「素色同じからず籬下に発き／繁花疑うらくは月中自り生ずるかと」。　**○提壺勧酒**　「提壺」は酒壺を提げる。また別の解釈として「提壺」は鳥の名。鵜鶘。また提壺蘆、提胡蘆ともいう。唐の白居易「早春提壺鳥を聞き、因りて隣家に題す」に「聴くを厭う　秋猿下涙を催すを／聞くを喜ぶ　春鳥提壺を勧むるを」。また宋の歐陽脩「啼鳥」に「独り花上の提壺〔葫〕蘆有り／我に勧む　酒を沽〔か〕いて花前に傾けよと」。ここは「壺を提ぐ」と「提壺鳥」の掛詞のように理解してよいかもしれない。　**○留連**　ぐずぐずして去るに忍びない。いつの間にか長居をする。じっくりと堪能する。梁の元帝「長歌行」に「人生は行楽のみ／何れの処か留連せざらん」。唐の李白「友人会宿」に「滌蕩す千古の愁い／留連す百壺の飲」。　**○芳春**　百花咲きにおう、かんばしい春。晋の陸機「文賦」に「落葉を勁秋に悲しみ／柔條を芳春に喜ぶ」。南斉の謝朓「東田に遊ぶ」に「芳春の酒に対せず／還って青山の郭を望む」。　**○数囀**　数声のさえずり。「ステン」と読む。　**○黄鶯**　うぐいす。唐の綦毋潛「章彝の第を下るを送る」（『三体詩』巻三）に「黄鶯啼いて馬に就き／白日暗くして林に帰る」。

《鳥のさえずりは花の中の音楽》

鳥たちは咲き乱れる花の枝に止まり、にぎやかに囀る。まるで音楽のようだ。その花の下、酒壺を携え酒を勧めて、仲間と共に（鳥と共に）春をじっくりと堪能しよう。するとまた聞こえてきたのは、新たに一曲、転がすような鶯のさえずり。この芳しき春の調べ。そして鶯の声は続く、古寺の前。

【余説】「鳥語は花中の管絃」というのは唐の崔湜の「春日幸して春宮を望むに奉和す」に「庭際に花飛んで錦繡合し／枝間に鳥囀りて管絃に同じ」とあるのと同じ発想。

「提壺勧酒」の語からすれば、鳥たちのさまざまな啼き声を並べて描いた宋の歐陽脩の「啼鳥」の詩を信玄は読んでいたかもしれない。だれかが「壺を提げ」と読んだら、信玄公、そうではない、それは「提壺」という名の鳥のことじゃ、と煙に巻いたのではないか。

〔四〕　**春山如笑**

簷外風光分外新
捲簾山色悩吟身
孱顔亦有蛾眉趣
一笑靄然如美人

春山笑うが如し

簷外の風光　分外に新たに
簾を捲けば　山色　吟身を悩ます
孱顔も亦た蛾眉の趣き有り
一笑靄然として美人の如し

▽七絶。上平声十一真韻（新・身・人）。
△「如笑」、大泉寺本作「如咲」。

○春山如笑　宋の郭熙の絵画論『林泉高致』山水訓に「春山艶冶にして笑うが如く、夏山蒼翠にして滴るが如く、秋山明浄にして粧えるが如く、冬山惨淡にして睡るが如し」。

○簷外　簷はのき、ひさし。唐の包佶「竇拾遺が病に臥して寄せらるるに答う」（『三体詩』巻二）に「客を送って屡しば聞く簷外の鵲」。　**○風光**　風と光。唐の賈島「三月晦日劉評事に贈る」（『三体詩』巻一）に「風光我が苦吟の身に別る」。同じく司空図「早春」（『三体詩』巻三）に「風光愛す可きを知る」。　**○分外**　とりわけ、非常に、格別に（口語的表現）。唐の高蟾「晩思」に「虞泉の冬恨　由来短く／楊葉春期　分外に長し」。宋の楊万里「秋雨嘆十解」に「湿　団扇を侵して　軽きこと能わず／冷　孤灯に逼りて　分外に明らかなり」。　**○捲簾**　簾を巻く。唐の王勃「滕王閣」に「珠簾暮れに捲く西山の雨」。　**○山色**　宋の蘇軾「湖上に飲す、初めは晴れ後に雨ふる」其の二に「山色空濛として雨も亦た奇なり」。　**○悩吟身**　「吟身」は漢籍に見えない語だが、おそらく詩を吟ずる人の意。「吟身を悩ます」は詩を吟じようとして、どう表現するか悩む、あるいは歌心が刺激されるの意だろう。前引の賈島「三月晦日劉評事に贈る」に「風光我が苦吟の身に別る」とあるのによれば、

ここも「吟に悩む身」と読む可能性も否定できないが、「山色悩吟身」という言葉の続き具合からすれば、やはり「山色」が「吟身を悩ます」と擬人法的に読ませるつもりだったのだろう。五山の詩僧東沼周巖の「詩して伯耆の康節俊少を招く」の詩に「秋鳴夜は永し　吟身を奈〔いか〕んせん」と「吟身」が単語として見えることを考えても、「吟身を悩ます」と読む方が正しいだろう。（因みに伊達政宗の詩「水辺の月」にも「此の景尤も奇にして簾外を見れば／水辺の佳興　吟身を悩ます」とある）。　○**孱顔**　山の高く険しいさま。孱は巉、顔は巌に通ず。唐の李華「含元殿の賦」に「峥嶸たる孱顔／下　南山を視る」。宋の王禹偁「畭田の詞」其の一に「大家力を斉せて孱顔を劚る」〔険しい山の木を切り倒す〕。同じく蘇軾「峡山寺」に「我行きて遅速無く／衣を摂りて孱顔を歩む」。また五山の詩僧絶海中津の「山」に「稜層として高く出ず　白雲の間／万仞の孱顔　天斧刪る」。同じく義堂周信の「臘八に徒に示す」に「遥かに怜む　螺髪の叟〔＝釈迦〕の／跣足にして孱顔を下りしを」とある。　○**蛾眉趣**　美人の眉のような雰囲気のゆるやかな弧を描く。「孱顔」険しい山も緑に芽吹いて、「蛾眉」美人の眉のような柔らかな山容をしめしている。「孱顔」の「顔」と「蛾眉」と結句の「笑」の字が縁語として連なって擬人法的な描写になっている。　○**一笑**　ちょっと笑う。白居易「長恨歌」に「頭を回らして一笑すれば百媚生じ／六宮の粉黛顔色無し」。ここでは「春山艶冶にして笑うが如し」の意。　○**靄然**　ぼんやりとかすむさま。唐の王昌齢「鄭県にて陶太公の館中に宿し馮六元二に贈る」に「飛雨祠上に来り／靄然として関中暮る」。唐の劉長卿「晩に湖口に次りて憶い有り」に「靄然として空水合し／目は極む平江の暮」。

《春の山は笑うがごとし》

軒端の向こうに見える春景色はことのほか鮮やかで、簾を巻いて見上げれば目に飛び込む山の姿は、何と表現してよいか分からないほどだ。高く険しい山肌も、やわらかな新緑に包まれて、美人の眉のような緩やかな曲線を描いている。ほんのりかすむその山容は美人がにっこり笑ったようではないか。

【余説】この詩に見える「春山笑うが如し」とか「孱顔も亦た蛾眉の趣き有り／一笑靄然として美人の如し」といった表現も、自然の擬人化であり、宋の郭熙『林泉高致』山水訓に「春山艶冶にして笑うが如く、夏山蒼翠にして滴るが如く、秋山明浄にして粧えるが如く、冬山惨淡にして睡るが如し」とあり、また蘇軾の「西湖を把って西子に比せんと欲すれば／淡粧濃抹総て相宜し」（「湖上に飲む　初め晴れ後に雨ふる」其二）、歐陽脩の「啼鳥」に「花は能く嫣然として我を顧みて笑い／鳥は我に飲むを勧めて無情に非ず」とあるような、宋代における自然の擬人化の流れに沿っているといえよう。

〔五〕　**古寺看花**　　**古寺（こじ）　花を看（み）る**

紺藍無処不深紅　　紺藍（こんらん）　処（ところ）として深紅（しんく）ならざるは無し
花下吟遊勝会中　　花下（かか）の吟遊（ぎんゆう）　勝会（しょうかい）の中（うち）
身上従教詩破戒　　身上（しんじょう）　従教（さきょ）あれ　詩　戒（かい）を破（やぶ）るを
挙盃終日酔春風　　盃（さかずき）を挙（あ）げ終日（しゅうじつ）　春風（しゅんぷう）に酔（よ）う

▽七絶。上平声一東韻（紅・中・風）。
△「花下」、大泉寺本誤作「花上」。

○**紺藍**　寺の異称。紺園〔こんおん〕・紺宇・紺殿・紺房などとも言う。『祖庭事苑』巻四に「紺園」を掲げて云う、「梵語、僧伽藍摩。此〔漢語〕には衆園と云う。西域に給孤独園・祇園・金園・鶏園の名有り。群生種植福慧を以て義と為す。皆な佛祠の通称なり。紺園は即ち紺宇なり。釈名に曰く、紺は含なり。青くして赤を含む色を謂うなり。内教に多く紺目・紺髪と称するは此の義を取るなり」とある。中村元『仏教語大辞典』には「紺は青であって赤を含むから、含むという意味がある。寺は一切の人を含み、功徳の種をまき、育てる所である、という意」と説明している。「藍」は梵語阿藍若〔アランニャ〕の略。寺の意。伽藍。　○**花下**　『和漢朗詠集』に白居易の「春江」の詩を引いて「鶯の声に誘引せられて花の下に来り／草の色に拘留せられて水の辺に坐す」とあり、『後撰和歌集』に「鶯のなきつる声にさそはれて花のもとにぞわれは来にける」の歌がある。　○**吟遊**　日本的表現で、詩歌を作りながら歩き回ること、あるいは旅すること。　○**勝会**　すばらしい宴会。嘉会。唐

の張又新「三月五日長沙の東湖に汎ぶ」（『三体詩』巻三）に「今従り勝会を留むれば／誰か看ん蘭亭を画くを」。　○**身上**　自分一身、自分自身。唐の徐凝「長慶の春」（『三体詩』巻一）に「身上の五労　仍お酒に病み／夭桃窓下花に背いて眠る」。　○**従教**　ままよ、さもあらばあれ。勝手にするがいい。宋の蘇軾「人の贈らるるに和す」に「壮心復た春流の起る無く／衰鬢従教〔さもあらば〕あれ病葉の零つるを」〔衰えた鬢の毛は病葉の落ちるように勝手に落ちるに任せる〕。明の高啓「夜雨」に「酔い来り独り青燈を滅して臥す／風雨従教〔さもあらば〕あれ　夜の長きに滴るを」。　○**詩破戒**　詩のルールを破る。　○**挙盃**　挙杯。さかずきを挙げる。唐の李白「月下独酌」に「杯を挙げて明月を邀え／影に対して三人と成る」。

《古い寺で花を看る》

古寺はいま花盛り。どこもかしこも深紅に染まっている。花の下では人多く集い、楽しい花見の宴。詩を詠じて春を楽しんでいる。私はといえば、酒も入って詩もいいかげん。詩のルールなど破ったっておかまいなし。杯を挙げて日がな一日、春風に酔う、この心地よさ。

【余説】「紺藍」という言葉、一般の大きな辞書や仏教語辞典の類を調べても出てこない特殊な仏教語彙で、禅籍の語句を取り上げ典拠を示し注釈した辞典『祖庭事苑』（宋・睦庵善卿撰）にかろうじて「紺園」の語が見える。『祖庭事苑』は五山の詩僧たちが禅籍を読む際、必携の書であった。したがって信玄は禅を学ぶ中で、五山の禅僧たちを通じて、何らかのかたちでこの「紺藍」の語に接する機会があったのであろう。いずれにしても特殊な語彙であり、わざわざこういう語彙を使うところに信玄の作詩の姿勢をうかがうことができる。

なお詩の中にしばしば「古寺」が登場するのも五山の詩の特徴で、義堂周信の詩に「三月初吉、普明国師及び諸老に陪して持地院に会す。〈古寺　花を看る〉を以て題と為し、各々一絶を賦す」と題するものがある。〈古寺　花を看る〉がなじみのタイトルであった様子がうかがえる。五山の詩僧の詩の流れを汲み、また実際、しばしば僧侶との交流のあった信玄の詩に（あるいは広く戦国武将の詩に）「古寺」の語が多く見えるのも自然なことである。

〔六〕　**惜落花**

檐外紅残三四峰
蜂狂蝶酔景猶濃
遊人亦借漁翁手
網住飛花至晩鐘

落花を惜しむ

檐外　紅残る　三四峰
蜂は狂い蝶は酔うて　景猶お濃やかなり
遊人も亦た漁翁の手を借り
飛花を網し住めて　晩鐘に至る

▽七絶。上平声二冬韻（峰・濃・鐘）。

△

○**檐外**　檐はのき、ひさし。檐外は簷外、薈外に同じ。　○**蜂狂蝶酔**　「蜂狂蝶乱」「蜂狂蝶浪」「蜂游蝶舞」「蜂游蝶戯」などさまざまな言い方があるが、慣用の成語として中国ではおおむね女色を逐うて放蕩する喩えとして用いられる。但しここは文字通りの意味で使われている。蜂は蜜を求めてぶんぶん飛び交い、蝶もまた花の香に酔ったようにひらひらと舞う。唐の岑参「山房春事其の一」に「風恬として日暖かく春光に蕩す／戯蝶游蜂　乱れて房に入る」。宋の呂本中「春日即事」に「乱蝶狂蜂　倶に意有り／兎葵燕麦　自ずから知無し」。また五山の詩僧鐵舟徳済「牡丹」に「蝶戯れ蜂遊びて山日斜めなり」。『中華若木詩抄』に釈賛寧「落花」の詩「蝶酔い蜂狂じて香正に濃なり」を抄して云う、「蝶ヤ蜂モ今日ヲ限リト花ニ付キ添ウテ離レモヤラヌホドニ、花ノ気ニ蝶モ酔ヒ、蜂モ狂ズルゾ。蜂モ、酔タルニヨリテ狂ズルゾ。…蝶酔蜂狂ズルコトハ、花香ガ濃ニシテ酒ノ如クナルニ因タコト也」と。すなわち晩春の景である。　○**遊人**　遊子に同じ。旅人。唐の姚揆「村行」（『三体詩』巻三）に「天淡くして雨初めて晴る／遊人恨み勝えず」。ここは自分のことをいう。　○**漁翁**　漁師。唐の柳宗元「漁翁」に「漁翁夜西巌に傍うて宿し／暁に清湘に汲み楚竹を然〔た〕く」。　○**網住飛花**　漁師の網を借りて広げ、落花を留めようとする。「網」は網するという動詞、「住」はその動詞に添えて「留める」の意。　○**晩鐘**　夕暮れを知らせる鐘。いりあいの鐘。唐の韋応物「秋景　琅邪の精舎に詣る」に「蒼茫として寒色起り／迢遞として晩鐘鳴る」。

《落花を惜しむ》

軒端の向こう、三つ四つの山にまだ紅い花が残っているが、春ももう終わりに近い。蜂は蜜を求めてぶんぶん飛び交い、蝶もまた花の香に酔ったようにひらひらと舞い、逝く春を惜しんでいるようだ。春ももうじき終わるが、それでもまだ春の気配は濃やかだ。山を歩く私もまた花の散り行くのを惜しんで、漁師に網を借りて、はらはらと散る花びらを留めようとする。そうこうするうちにいつの間にか夕暮れの鐘がなる時刻となってしまった。

【余説】転句に「漁翁」が登場するのは五山の詩僧たちの愛好するモチーフを受け継ぐもの。唐の柳宗元の「江雪」、「千山鳥飛ぶこと絶え／万径人蹤滅す／孤舟蓑笠の翁／独り釣る寒江の雪」や「漁翁」、「漁翁夜西巌に傍うて宿し／暁に清湘に汲み楚竹を然く」云々に拠る。詳しくは「〔十二〕便面蘆間有漁」の余説参照。

この詩はそういう漁翁を登場させ、脱俗の雰囲気を作ったうえで、「飛花を網し住めんとして　晩鐘に至る」という風流優雅な「遊人」を描き出し、起句承句の「蜂狂蝶酔」の狂騒から一転して、閑かに春を惜しむ情を伝えている。

〔七〕　**新緑**

春去夏来新樹辺
緑陰深処此留連
尋常性癖耽閑談
不愛黄鶯聴杜鵑

新緑

春去り夏来たる　新樹の辺
緑陰深き処　此に留連す
尋常の性癖　閑談に耽り
黄鶯を愛さず　杜鵑を聴く

▽七絶。下平声一先韻（辺・連・鵑）。
△「閑談」、類従本作「閑淡」

○**春去夏来**　岑参「敷水にて歌いて賓漸の京に入るを送る」に「春去り秋来りて相待たず／水中月色　長えに改まらず」。李白「望夫山」に「春去り秋復た来り／相思幾時か歇む」。　○**緑陰**　緑の木陰。晩唐の韓偓「華を惜しむ」（『三体詩』巻二）に「堦に臨んで一盞春酒を悲しむ／明日池塘　是れ緑陰」。
○**留連**　ぐずぐずして去るに忍びないさま。またじっくり堪能するさま。「〔三〕鳥語花中管弦」に既出。　○**尋常**　ふつう、ふだん。杜秉「寒夜」に「尋常一様　窓前の月／纔かに梅花有り　便ち同じからず」。劉禹錫「烏衣巷」に「旧時王謝堂前の燕／飛んで入る尋常百姓の家」。　○**閑談**　心しずかにのんびりと話すこと。唐の白居易「病中友人相訪う」に「閑談は服薬に勝る／稍や心情有るを覚ゆ」。　○**聴杜鵑**　「杜鵑」はほととぎす。唐の李商隠「錦瑟」（『三体詩』巻二）に「荘生の暁夢　胡蝶迷い／望帝の春心　杜鵑に託す」。「聴く」は耳を傾けて（意識を集中して）聴く。（「聞く」は聞こえる）。

《新緑》

春が去り夏が来て、新緑に包まれた木々のふもと、緑陰深きあたりに身を休めて、私はいつまでも立ち去ることができない。いつもの習慣で友との閑談に時を過ごす。騒がしいおしゃべりではない。閑かな語りである。ちょうど鶯のさえずりよりも、ホトトギスの啼き声にじっと耳を傾けるように。

【余説】「尋常の性癖　閑談に耽り」『甲陽軍鑑』巻九に晴信公（信玄）十九歳の折のこととして、「晴信公無行儀〔ブギヤウギ〕にてまします事、…其子細ハ、わかきことのばら衆、或ハ、若き女房たちをあつめたまい、日中にても御座敷のとを立てまわし、昼といゑども蝋燭をたて、一切よるひるのわきまへもなく、よるハミだれどり〔乱れ鳥〕までのくるい、昼ハ九つまでおより候へバ、…たまたまおもてへ御出の時分ハ出家衆をあつめ、詩をつくりなさるる御会あれば、…晴信公、日夜のくるひ、あそばすものハ詩作計被成候…」などとあるように、若いころより仲間や僧侶と集い、語りや詩作に耽る習慣があり、まつりごとはそっちのけであった様子が伝えられている。家来の板垣信形にはそれを「御身のすきたまふ事をすごして、こゝろのまゝにあそばすハ、信とら公の百層倍も悪大将に御座候」と諫められ、「晴信公、そこにて会得ましまし、板垣信形を、御寝なる座へめしつれられ、なミだをながし、誓紙をあそばし、無行儀をなをし被成ゝ儀、天文八年己亥、霜月朔日、晴信公十九歳の御時也」という。その折の反省を自覚して、いささか自虐的に「尋常の性癖　閑談に耽り」と言っているようである。

〔八〕　**薔薇**

庭下留春暁露濃

薔薇

庭下　春を留めて　暁露濃やかなり

浅紅染出又深紅
清香疑自昆明国
吹送薔薇院落風

浅紅を染め出し　又た深紅
清香　疑うらくは昆明国自りするか
吹き送る　薔薇　院落の風

▽七絶。上平声一東韻（紅・風）上平声二冬韻（濃）通押。
△

○**留春**　春を留める、春の逝くのを惜しむ。宋の宋迪「龍池春草」に「幽姿偏えに暮を占め／芳意春を留めんと欲す」。　○**暁露**　あさつゆ。唐の韋応物「暁に園中に至る」に「秋塘衰草偏く／暁露紅蓮を洗う」。宋の陸游「花時遍く諸家の園に遊ぶ」に「花を看る　南陌復た東阡／暁露初めて乾いて日正に妍なり」。菅原道真「萩」（『和漢朗詠集』上）に「暁の露に鹿鳴いて花始めて発〔ひら〕く／百般攀じ折る一時の情」。　○**浅紅染出又深紅**　「染出浅紅又深紅」の倒装。　○**清香**　清らかな香り。宋の林逋「梅花」に「天の清香を与えしは私有るに似たり」。蘇軾「春夜」に「春宵一刻直千金／花に清香有り　月に陰有り」。ここでは薔薇の香り。　○**昆明国**　昆明は今の雲南省にある地名。南唐の張泌「粧楼記」に「周の顕徳五年、昆明国、薔薇水十五瓶を献ず。云う西域より得たりと。以て衣に灑がば、衣弊するも香り滅せず」。「薔薇水」は香水の一種。　○**院落**　中庭。宋の蘇軾「春夜」に「鞦韆院落　夜沈沈」。

《薔薇〔その一〕》

庭で行く春を留めて薔薇の花に朝露が濃やかに降りている。その花の染め出す色は、浅い紅、また濃い紅。その清らかな香りは遠い昔、薔薇の香水を献じたという昆明国から来たかものか、中庭に咲く薔薇の香りが風に吹き送られてくる。

【余説】この詩も昔、昆明国から薔薇の香水十五瓶が献上されたという南唐の張泌「粧楼記」を典拠とするめずらしい話に基づき、知識の広いところを示している。何に基づいて信玄がこの話を知ったか、未詳。

〔九〕又

満院薔薇香露新
雨餘紅色別留春
風流謝傅*今猶在
花似東山縹緲人

満院の薔薇　香露新たなり
雨餘の紅色　別に春を留む
風流の謝傅　今猶お在り
花は東山縹緲の人に似たり

▽七絶。上平声十一真韻（新・春・人）。
△「謝傅」、底本、国会本、尊経閣本、磯貝本、類従本、大泉寺本皆作「謝伝」。河住本、荻原本改作「謝傅」、似是也。今、両氏の説に従い改める。
「縹緲」、国会本、尊経閣本、磯貝本作「縹紗」、類従本、大泉寺本作「縹渺」。

○**満院**　庭中。院は中庭。晩唐の高駢「山亭夏日」に「水精の簾動いて微風起こり／一架の薔薇　満院香し」。　○**香露**　唐の李頎「裴騰を送る」に「香露百草に団く／紫梨万株を分つ」。同じく温庭筠「芙蓉」に「濃艶なる香露の裏／美人清鏡の中」。　○**別留春**　「別に」（別して）はとりわけ。　○**風流**　洒脱放逸、風雅瀟洒のさま。『後漢書』方術伝の論に「漢の世の所謂名士なる者は、其の風流知る可し」。唐の杜甫「壮遊」に「王謝〔＝王導・謝安〕風流遠く／闔閭丘墓荒る」。雪村友梅「東丹の詩を作りて相招くに和し兼ねて訪及するも値わず」に「千古の風流　杜牧之」。義堂周信「墨竹」に「慚愧す風流の杜牧之」。絶海中津「杜牧集を読む」に「風流独り愛す樊川子〔＝杜牧〕」。『碧巌録』巻七第六十七則「若し草に入らずんば争でか端的を見ん。風流ならざる処　也た風流」。信玄の「〔十七〕濃州の僧に寄す」にも「多情　尚わくは風流の客に遇い／共に士峰に対して雪を吟じて看ん」とあり、また遺偈にも「大底　他の肌骨好きに還さん／紅粉を塗らずして　自ら風流」とある。　○**謝傅**　東晋の謝安。「傅」は太傅。謝安は後引のとおり死後、太傅の職位を追贈された。謝太傅と呼ばれる。『晋書』謝安伝に云う、「初め辟除せらるるも並びに疾を以て辞す。有司奏して安召さるるも、歴年至らず。…遂に東山に棲遅す。常に臨安の山中に往き、情を丘壑に放〔ほしいまま〕にす。然れども

遊賞する毎に必ず妓女を以て従わしむ。…尋いで薨ず。時に年六十六。…太傅を贈らる」云々。『蒙求』巻上にも「謝安高潔」として『晋書』謝安伝を引く。（「風流」という言葉が前述の通り王導・謝安・杜牧といった人名と直接繋がる言葉であるところからも「謝伝」よりも「謝傅」が勝ることは裏付けられよう）。　○**東山**　東山は『晋書』謝安伝の「東山に棲遅す」の東山。謝安が隠棲し、妓女を携えて遊んだところ。李白「東山吟」に「妓を携う東土の山／悵然として謝安を悲しむ／我が妓は今朝花月の如し／他の妓は古墳荒草寒し」、同じく「東山を憶う二首」其一に「東山に向かわざること久し／薔薇幾度か花さく」。　○**縹緲**　「縹渺」とも書き、遠く微かなさま。高遠にしてうかがいしれぬさま。李白「天門山」に「参差たり遠天の際／縹緲たり晴霞の外」、白居易「長恨歌」に「忽ち聞く海上に仙山有り／山は虚無縹緲の間に有り」。宋の蘇軾の詞「卜算子、黄州定慧院寓居の作」に「誰か見ん　幽人の独り往来するを／縹緲たり孤鴻の影」。

《薔薇〔その二〕》

中庭いっぱいに咲き誇る薔薇の花。夜来の雨もあがって、花に含まれた露がきらめく。庭中いい香り。雨に洗われてその紅の鮮やかなこと。春ももう終わろうとしているが、ここだけは特別にまだ春が留まっているかのようだ。

この中庭いっぱいの薔薇の中、薔薇を愛した風流の謝太傅の面影は、いまなおたしかに残っている。この薔薇の花は、隠棲した東山の奥深く、縹緲として世俗を離れた謝太傅その人の高雅さに、まさによく似ているではないか。

【余説】謝安・東山・薔薇を組み合わせたのは李白の「東山を憶う二首」其一「東山に向かわざること久し／薔薇幾度か花さく／白雲還た自ら散じ／明月誰が家にか落つ」に基づいている。

転句・結句の理解については難しいところがあるが、「風流の謝傅　今猶お在り」は、風流の謝太傅の面影はいまなおここ（謝太傅が愛した薔薇の花のなか）に残っている。「花は東山縹緲の人に似たり」は、この薔薇の花は、隠棲した東山の奥深く、縹緲として世俗を遠く離れた謝太傅その人に、まさによく似ているではないか、と理解しておく。

ここの理解について荻原留則氏は云う、「風流の隠者謝太傅は、今此処にも居る。と信玄公は自身を謝太傅に擬しているのである。とすれば、庭園のバラの花は、当然に青い薄絹の衣装〔引用者注、荻原氏は「縹紗」では平仄には合わないが、内容から「縹紗」に作る方が可とし、縹色（はなだ色＝そら色）の薄絹と理解する」に身を包んだ、東山の謝傅の園に従う侍女になぞらへなければ、詩にならないのである。この故に私は平仄の合わない紗の字を尊いものに見ているのである」と。

しかし承句に「雨餘の紅色　別に春を留む」と紅色の薔薇を出しておきながら、薔薇の花になぞらえられた侍女の衣装について、唐突に縹色を出してくるのはいささか無理があろう。

「縹渺」は、注にも引いた蘇軾の詞に「誰か見ん　幽人の独り往来するを／縹緲たり孤鴻の影」とあるように、「幽人」「孤鴻」をもって自ら喩えるような、世俗を超えた隠者の姿を形容するにふさわしい畳韻の語であり、ここもそのように理解したい。

〔十〕　**旅館聴鵑**

空山緑樹雨晴辰
残月杜鵑呼夢頻
旅館一声帰思切
天涯瞻恋蜀城春

旅館にて鵑を聴く

空山の緑樹　雨晴るる辰
残月の杜鵑　夢を呼ぶこと頻りなり
旅館一声　帰思切なり
天涯瞻恋す　蜀城の春

▽七絶。上平声十一真韻（辰・頻・春）。
△「帰思切」、大泉寺本誤脱「思」字。

○**空山**　ひと気の無いしーんとした山。唐の王維「鹿柴」に「空山人を見ず／但だ人語の響きを聞く」。○**緑樹**　緑の樹々。唐の王維「崔処士が林亭に題す」（『三体詩』巻一）に「緑樹の重陰　四鄰を蓋い／青苔日に厚うして自ら塵無し」。　○**辰**　とき。　○**残月**　唐の杜常「華清宮」（『三体詩』巻一）に「暁風残月華清に入る」。同じく劉洵伯「早行」に「一星深戍の火／残月半橋の霜」。　○**杜鵑**　ほととぎす。伝説によれば蜀の望帝杜宇は死してその魂が化して杜鵑となり、蜀を恋しがって、血を吐いて啼く。その声は「不如帰去」（帰り去〔ゆ〕くに如かず）と聞こえるという（晋の常璩『華陽国志』巻三蜀志、その他）。唐の杜甫「杜鵑行」に「君見ずや昔日蜀の天子／化して杜鵑と為りて老鳥に似たり／…／四月五月偏えに号呼す／其の声哀痛口血を流す／

訴うる所何事ぞ常に区区たり／爾豈に摧残せられて始めて発憤するか／…」。また李商隠「錦瑟」（『三体詩』巻二）に「荘生の暁夢　胡蝶迷い／望帝の春心　杜鵑に託す」。宋の陸游「海棠歌」に「風雨春残　杜鵑哭す／夜夜寒衾蜀に還るを夢む」。○**呼夢**　夢を醒ます。眠りを妨げる。○**旅館一声帰思切**　旅の宿で聴くホトトギスの鳴き声に故郷へ帰りたいという思いがしきりに湧き起こる。唐の高適「除夜の作」に「旅館の寒燈独り眠らず／客心何事ぞ転た凄然／故郷今夜千里を思う／霜鬢明朝又一年」。○**一声**　唐の熊孺登「湘江に夜汎ぶ」（『三体詩』巻一）に「奈〔いかん〕ともする無し　子規の蜀に向うを知るを／一声　声は似たり　春風を怨むに」。○**帰思**　故郷に帰りたいという思い。陶淵明「始めて鎮軍参軍と作〔な〕り曲阿を経て詩を作る」に「眇眇として孤舟逝き／緜緜として帰思紆る」。また唐の雍陶「孫明府の旧山を懐うに和す」（『三体詩』巻一）に「秋来月を見て帰思多し」、同じく方澤「武昌にて風に阻まる」に「江上春風客舟を留む／無窮の帰思　東流に満つ」、杜審言「早春の遊望」（『三体詩』巻三）に「忽ち古調を聞いて／帰思巾を沾さんと欲す」など。○**天涯**　天の果て。天辺。初唐の王勃「杜少府の任に蜀州に之くを送る」に「海内　知己存す／天涯　比鄰の若し」。○**瞻恋**　依り慕う。仰ぎ慕う。唐の薛存誠「謁見の日将に双闕に至らんとす」に「雕蟲竟に何ぞ取らん／瞻恋迴るを知らず」。○**蜀城**　杜鵑に化した蜀の望帝杜宇も故郷の蜀城の春を懐かしく思っているだろう。『改訂甲陽軍鑑』（磯貝正義・服部治則校注）に注して云う「蜀城は躑躅ケ崎の武田氏の城。甲斐の国を地形から蜀に喩えたともいえる」と。

《旅の宿でほととぎすを聴く》

だれもいない山々に木々が緑の色を濃くしている。昨夜来の雨が上がって、残月が残る空にホトトギスが啼いている。夜明け前の寝床でその声に夢から覚める。旅の宿でホトトギスの声を聴けば、故郷への思いが募る。

ホトトギスは蜀の望帝が死んで、その魂が化した鳥と言われるが、故郷の蜀を懐かしんで血を吐いて啼くと言われるその声を聴けば、私も同様に空の果てから蜀（躑躅ケ崎）の春が恋しくて仕方なくなるのだ。

【余説】「〔七〕新緑」の詩に「黄鶯を愛さず　杜鵑を聴く」とホトトギスを好む姿勢が示されているが、この詩では雨の上がった夜明け前の空にホトトギスの声を聴いて、蜀の望帝杜宇の伝説を思い浮かべ、そのホトトギスが恋うる蜀と、自分の故郷である躑躅ケ崎とを重ねて（躑と蜀）、望郷の思いを綴っている。

〔十一〕　**閏月花**

妖艶紅花出寿安
風光閏月興猶残
騒人要見十三葉
未在姚家黄牡丹

閏月の花

妖艶たる紅花　寿安に出ず
風光閏月　興猶お残る
騒人　十三葉を見んと要するも
未だ姚家の黄牡丹を在ず

▽七絶。上平声十四寒韻（安・残・丹）。
△「閏月」、河住本作「閏月」。

○**閏月**　陰暦では一年を三五四日とする。そこで余った時間を累積してほぼ三年で一月とし、一年のうちに加える。こうした方法を暦法では閏という。閏を置くのは三年で一月、五年で二月、十七年で七月。古い時代には閏を年末に置いていたので「十三月」あるいは「閏月」と称した。後には特定の月の後に置いて「閏何月」と言うようになった。なお河住本は「閏月花」を「閏月花」に改め、「牡丹花の異名」とする。根拠不明。○**妖艶**　あでやかで美しい。宋の晏殊「浣溪沙」詞に「三月和風　上林に満ち／牡丹の妖艶　千金に直す」。○**寿安**　地名。今の河南省宜陽県。牡丹の産地。またそこに産する牡丹の品種名。宋の歐陽脩の「洛陽牡丹記」に「細葉・麤葉の寿安は皆な千葉にして肉紅の花、寿安県錦屏山中に出ず。細葉なる者尤も佳なり」と。また宋の丘璩「牡丹栄辱志」に「姚黄を王と為し、魏紅を妃と為し、細葉の寿安を九嬪と為し、麤葉の寿安は世婦と為す」とある。○**風光**　風と光。司空図「早春」（『三体詩』巻三）に「風光愛す可きを知る」。○**騒人**　詩人、文人。梁の蕭統「文選序」に「騒人の文、茲自りして作る」。范仲淹「岳陽楼記」に「遷客騒人　多く此に会す」。○**十三葉**　「葉」は花瓣のこと。「百葉

桃」「千葉蓮」などという（いわゆる八重咲き）。例えば唐の韓愈「百葉桃花に題す」に「百葉の双桃　晩更に紅なり」。ここで「十三葉」というのは、花びらが十三枚ある牡丹ということであろう。荻原留則氏の解説に云う、「十三月の閏月歳の牡丹をいう。」「牡丹の花弁は普通十二弁とされているが、十三月の閏月の歳に咲く花は十三弁あるといわれ、特に十三紅と呼び名花として、格別に珍重されていた」。この説明、何に拠るか未詳。　**○未在**　「在」は察。よく見る。『尚書』舜典「在璿璣玉衡」の孔伝に「在は察なり」。　**○姚家黄牡丹**　牡丹の中の最高品種。歐陽脩の「洛陽牡丹記」に「姚黄花なる者は、千葉にして黄花、民の姚氏の家に出ず。…銭思公〔銭惟演〕嘗て曰く、人は謂う、牡丹は花の王と。今、姚黄は真に王と為す可し。而して魏薬は乃ち后なり、と」。また宋の周師厚「洛陽牡丹記」に云う、「其の開くこと最も晩く、衆花彫零の後、芍薬未だ開かざるの前に在り。其の色甚だ美にして、高潔の性、敷栄の時、特に衆花に異なる。故に洛人之を貴び号して花王と為す。城中毎歳三数朶を開くに過ぎず。都人士女必ず城を傾けて往きて観る。郷人老を扶け幼を携え、千里を遠しとせず。其の時の貴重する所と為ること此の如し」と。

《うるう月の花》

妖艶なる紅い牡丹。中国は寿安の産という。この庭園の紅牡丹は、風と光の溢れる閏月に入ってもなお、そのあでやかさを失わない。詩を愛する仲間たちは、閏月に咲くめずらしい「十三葉」というのを見てみたいなどと言っているが、中国にはもっとめずらしい牡丹の中の最高品種「姚家の黄牡丹」があるという。君たちはそれを知らないか。

【余説】ここの牡丹に関する「寿安」「姚家黄牡丹」などの品種名は、宋の歐陽脩の「洛陽牡丹記」等に詳しく見え、信玄がこれを読んでいたことは確かだろう。「十三葉」に関しては何に基づくか未詳。しばらく荻原留則氏の『改訂版 機山武田信玄公の漢詩（解説）』に見える解説に拠る。

荻原氏は語注に引用したような解説をされる一方で、北宋の『洛陽花木記』に言及し、そこに「一〇九の品種のうち、十三の黄花の品種が名を連ねる」としており、「この席の詩人達は、北宋の『洛陽花木記』周叙著の中にある十三葉の黄花の牡丹を見て見たいなど言うが、」と訳しておられる。前述の説明とは異なる、別解ということになる。

念のため『洛陽花木記』を繙いて見ると、確かに「千葉黄花其別十」として「姚黄」以下十品種、「多葉黄花其別三」として「古姚黄」等三品種を挙げており、併せれば十三という数字になるが、「北宋の『洛陽花木記』周叙著の中にある十三葉の黄花の牡丹」と言えるような記述は見えない。「十三種」とは言えても「十三葉」とは言えないのである。

ここはやはり語注に引用した荻原氏の説のように、「閏月」すなわち十三月と「十三葉」とに何らかの繋がりを考えるべきであろう。ただそのような説明が何という書物にあるのか不明なのである。

河住玄氏は『武田信玄の詩歌』において「十三葉」に注して「千葉の品種を最高とするのに対して、簡素な品種をいってゐる。」とし、「簡素な風流を愛する文人は、洛陽第一の姚家の千葉の品種よりは僅か十三葉の品種を愛好賞美してゐる。」と訳しておられる。これだとわざわざ「十三」という数字を出してきている意味が説明できない。

いずれにしてもよく分からないが、転句、結句の「騒人　十三葉を見んと要するも／未だ姚家の黄牡丹を在〔み〕ず」とは、「十三葉」をめずらしがっているようではまだまだだ。世の中にはもっと貴重な牡丹があって、「…故に洛人之を貴び号して花王と為す。城中毎歳三数朶を開くに過ぎず。都人士女必ず城を傾けて往きて観る。郷人老を扶け幼を携え、千里を遠しとせず。其の時の貴重する所と為ること此の如し」という「姚黄花」というものが中国にはあるという。君たちはそれを知らないのか、というこころだろう。なんとも衒学的な物言いである。

宋の蘇軾が「荔枝の嘆」という詩の中で、銭惟演という男が皇帝にへつらうために牡丹の最高品種「姚黄花」を献上したのを批判して、「洛陽の相君　忠孝の家／憐れむべし　亦た姚黄花を進めしを」と歌い、そこに自注して「洛陽の貢花、銭惟演より始まる」と記したのは、悪しき先例を開いた銭惟演に対する春秋の筆法である。信玄が「姚家の黄牡丹」など持ち出して、どうだ知っているか、などと言うのは、東坡先生なら何と言うか。

〔十二〕　便面蘆間有漁

山色水光烟接天
漁翁江上棹蘆辺
丹青若写得勝景
万里風波一釣船

便面　蘆間　漁有り

山色水光　烟　天に接す
漁翁　江上　蘆辺に棹さす
丹青　若し勝景を写し得ば
万里の風波　一釣船

▽七絶。下平声一先韻（天・辺・船）。
△「烟接天」、大泉寺本作「連接天」。
「棹蘆辺」、大泉寺本作「掉蘆辺」。

○**便面**　扇面。以下の五首は扇面に描かれた画に題した詩であろう。
○**山色水光**　宋の蘇軾「湖上に飲す、初めは晴れ後に雨ふる」其の二に「水光瀲灩として晴れて方に好し／山色空濛として雨も亦た奇なり」。　○**烟接天**「烟」はかすみ、もや。「接天」は空までとどく。唐の杜審言「襄陽城に登る」に「楚山地に横たわりて出で／漢水天に接して回る」。　○**漁翁**　漁師。唐の柳宗元「漁翁」に「漁翁夜西巌に傍うて宿し／暁に清湘に汲み楚竹を然［た］く／煙銷え日出でて人を見ず／欸乃一声山水緑なり」。　○**丹青**　丹はあか、青はあお、絵の具の色より転じて絵を指す。唐の杜甫「丹青の引」に「丹青老いの将に至らんとするを知らず／富貴　我に於いて浮雲の如し」。　○**勝景**　すぐれた景色。よい眺め。金の元好問「黄華山に遊ぶ」に「手中の仙人九節の杖／毎に恨む勝景窮むるを得ざるを」。　○**釣船**　釣り船。唐の杜牧「漢江」（『三体詩』巻一）に「南去北来　人自ら老い／夕陽長しえに送る　釣船の帰るを」。

《川辺の葦の間の漁師を描いた扇面に題して》

山の姿も水面の光もぼんやりと閉ざされて、霞は空まで広がっている。年老いた漁師が川の蘆辺に舟をこぐ。絵の具でこのすばらしい眺めを描いたならば、万里に広がる波間に浮かぶ小さな釣り船。

【余説一】五山の詩僧 絶海中津の漢詩集『蕉堅藁』に「扇面画に題す七首」（五絶）や「扇面画に題す三首」（七絶）が収められており、信玄の五首もその顰に倣った可能性がある。

そもそも五山の詩僧の詩には画を見て、その画題をひとつの公案として詩作するものが多く、如拙の「瓢鮎図」に三十一人の禅僧たちの題詩が書き加えられた詩画軸などはその代表といえよう。

こうした絵画と詩のコラボレーションは、宋の詩人たち、特に王安石・蘇軾・黄庭堅などの詩人が盛んに作った題画詩に淵源する。黄庭堅に、恵崇の煙雨帰雁の図を見て瀟湘・洞庭に遊んだ気分になり、帰ろうと思って小舟を喚ぼうとしたら、「画ではないか」と友達に言われ、はっと我に返るという詩（「鄭防の画夾に題す」其の一）がある。そのように詩人たちは画の中に浸り、山川に遊んだ気分になって、一時を忘れるという体験を喜んだのである。宋の郭熙の絵画論『林泉高致』山水訓によれば、君子が山水を愛する所以は、彼らが社会的責任を持ち、公的な勤めを離れるわけにいかない立場にあるので、自由に山川に遊び、あるいは隠逸の暮らしをするわけにもいかず、代わって山水を描いた画を尊んだのである、と言っている。

そうした画を通じての空想的な逍遥という中国知識人の詩的伝統のほかに、もう一つここで注目しておかなければならないことは、日本の和歌の世界における題詠の伝統である。和歌の世界で題詠が盛んであったことは周知の通りだが、信玄の和歌作りにも題詠の姿勢がうかがえる。信玄には自らまとめて法善寺に奉納した和歌百首がある（自筆の和歌百首一軸は消失したが、消失前に書写したものが『武田晴信朝臣百首和歌』として刊行されている）が、その全てに「早春山」「海霞」「朝鶯」「忍恋」「不遇恋」のごとき漢字二、三字の題が付いており、題詠というスタイルで歌が作られている様子がうかがえる。

武田信玄における詩的文学が、一方で宋の詩人たちの山水画への題詩の伝統を受けた、五山の詩僧たちの詩画軸の流れを源流としつつ、一方で日本の和歌の題詠の伝統をも受けて、その合流地点に、この信玄の便面画題詠五首が生れているということができよう。

【余説二】漢籍の世界では、漁師は常に世を隠れた隠者の仮のすがた。釣船に乗り、釣り糸を垂れる老人のすがたは、五山の詩僧たちの詩の中にも繰り返し登場する。

絶海中津「寒江独釣の図」に「独り寒江に釣るは何処の翁ぞ／莎衣雪に堪え　又た風に堪う」、別源円旨〔一二九四～一三六四〕「江上の晩望に和す」に「翠烟収め尽して水天寛し／江上の漁翁　独り寒に釣る」。中巌円月〔一三〇〇～一三七五〕「雪に題して懐いを寄す」に「高楼厭厭として誰か冷を知らん／肯て管せんや　寒江独釣の漁」など。その源が柳宗元「江雪」の「孤舟蓑笠の翁／独り釣る寒江の雪」にあることは言うまでもない。

〔十三〕　**便面有雁**

水緑山青欲雨初
数行鴻雁渡長虚
天涯高処要通信
定可蘇卿胡地書

便面　雁有り

水緑に山青く　雨ふらんと欲する初め
数行の鴻雁　長虚を渡る
天涯高き処　信を通ぜんと要するは
定めて蘇卿胡地の書なる可し

▽七絶。上平声六魚韻（初・虚・書）。
△有雁・鴻雁の「雁」の字、国会本、尊経閣本、類従本、大泉寺本作「鴈」。「鴈」は「雁」の別体。
「胡地」、大泉寺本誤作「湖地」。

○**水緑山青**　唐の杜甫「絶句」に「江碧にして鳥逾いよ白く／山青くして花然えんと欲す」。○**鴻雁**　かり。鴻鴈。『詩経』小雅・鴻鴈に「鴻鴈于に飛ぶ／肅肅たる其の羽」。毛伝に「大を鴻と曰い、小を鴈と曰う」。○**長虚**　果てしない空。長空、長天。○**天涯**　空の果て。「十　旅館聴鵑」の注参照。○**通信**　信は手紙。雁信。蘇武の故事から雁は手紙を運ぶとされている。○**蘇卿胡地書**　匈奴に囚われた漢の使者蘇武が雁の脚に手紙を結びつけて生存を知らせたという故事に基づく。『漢書』蘇武伝に云う、「天子、上林中に射て雁を得たり。足に帛書を係ぐ有りて言う、武等、某沢中に在りと」。

《雁を描いた扇面に題して》
水は緑に山は青く、雨の降りそうな空。数行の雁が果てしない空を渡っていく。天の果ての高い空の上で手紙を運ぼうとするのは、きっと漢の蘇武が匈奴の地から託した手紙であろう。

【余説】扇面に描かれた雁の画を見て、『漢書』蘇武伝の雁書の故事を思い出している。

〔十四〕　**便面水仙梅花**

風送清香寂寞浜
諸公携酒又逡巡
与梅故有弟兄約
黄玉花開一様春

便面　水仙梅花

風は清香を送る　寂寞の浜
諸公酒を携えて又た逡巡す
梅と故より弟兄の約有り
黄玉の花開く　一様の春

▽七絶。上平声十一真韻（浜・巡・春）。
△「寂寞浜」、大泉寺本誤作「寂莫鬢」。
「故」、国会本、尊経閣本、磯貝本、類従本作「胡」。ただし国会本、尊経閣本、磯貝本いずれも振り仮名して「コトサラニ」とあり。
「花開」、大泉寺本作「華開」。

○**清香**　清らかな香り。ここは題にある水仙と梅の花の香り。宋の林逋「梅花」に「天の清香を与えしは私有るに似たり」。蘇軾「春夜」に「春宵一刻直千金／花に清香有り　月に陰有り」。○**寂寞浜**　ひと気の無いもの静かな岸辺。五山の詩僧　義堂周信〔一三二五～一三八八〕の「雪中、三友の訪うを謝す」に「諸峰雪擁す　玉嶙峋／独り松門を掩ず　寂寞の浜」。○**逡巡**　ここは徘徊する、滞留するの意。たちもとおる。漢の王逸「九思・憫上」に「圃藪に逡巡して／彼の畛陌に率う」。○**故**　もとより。むかしから。○**弟兄約**　水仙が梅と兄弟の契りを結んでいる。宋の黄庭堅「王充道、水仙花五十枝を送る。欣然として心に会い、之が為に詠を作す」の詩に、水仙を詠んで「香を含み体は素〔しろ〕く　城を傾けんと欲す／山礬〔沈丁花の類〕は是れ弟梅は是れ兄」とあるのに基づく。○**黄玉花**　水仙の黄色い花と梅の玉の如き白い花。○**一様春**　一様は同じさま。杜秉「寒夜」に「尋常一様　窓前の月／纔かに梅花有りて便ち同じからず」。

《水仙と梅花を描いた扇面に題して》
風が清らかな香を運んでくる。ひと気の無いしんと静まり返った岸辺。そこへ貴公子たちが酒を携えてやってくる。岸辺をたちもとおり、春を探る。彼らの目の前には春の光のもと、白く咲く梅の花と岸辺の水仙が咲いている。その清らかなすがたよ。この水仙は梅とともと兄弟の契りでも結んでいたのか、黄色の花と白玉の花とが春の日差しのもとでいっしょに咲いている。

【余説一】水仙と梅を描いた扇面なのだろうが、詩には水辺を訪れた公達たちを登場させ、酒を飲みつつ春を探るという王朝絵巻風の情景を描き出している。信玄は『伊勢物語』を愛読したというが（今川義元に『伊勢物語』を借りてなかなか返さず、義元が催促したという逸話が残っている）、その『伊勢物語』に、水辺を逍遥して酒を飲み歌を詠むという場面が何度か出てきて、この詩のイメージの一源流をなしていると想像される。

【余説二】転句の水仙が「梅と故より弟兄の約有り」というのは、宋の黄庭堅の「王充道、水仙花五十枝を送る。欣然として心に会い、之が為に詠を作す」と題する詩に、水仙を詠んで、「香を含み体は素〔しろ〕く　城を傾けんと欲す／山礬は是れ弟　梅は是れ兄」とあるのに基づく。いずれも芳香を放つ梅・水仙・山礬〔沈丁花の類〕を並べて、水仙を真ん中に、兄の梅、弟の山礬としているのを受けて、こう言っているのである。（この場合も黄庭堅の詩を踏まえているということを知らないと「故より弟兄の約有り」という詩句の意味がよくつかめず、それゆえに写本、刊本みな「故」の字を「胡」にしたり、「コトサラニ」と振り仮名を付けるというような誤りを犯しているのである。）

〔十五〕　**便面半月照梅花**　　**便面半月梅花を照らす**

昏月横斜欲夜時　　昏月横斜　夜ならんと欲する時
梅花秀色似臙脂　　梅花秀色　臙脂に似たり
湖山疎影茂陵藁　　湖山の疎影　茂陵の藁
涼水風標元祐枝　　涼水の風標　元祐の枝

▽七絶。上平声四支韻（時・脂・枝）。

△

○**昏月横斜**　昏月は黄昏の月。漢語には見えない表現。北宋の林逋「山園小梅」に「疎影横斜　水清浅／暗香浮動　月黄昏」とある、その「月黄昏」に基づく造語であろう。なおこの詩の転句「湖山疎影」の「疎影」も林逋の「疎影横斜」に拠る。　○**秀色**　ひいでたすがた（ひいでた容色）。晋の陸機「日出東南隅行」に「鮮膚一に何ぞ潤える／秀色餐す可きが若し」。　○**臙脂**　化粧用のべに。「秀色」とつながり美女が真っ赤なべにをさしたような雰囲気を描いている。　○**湖山**　ここでは林逋が隠棲した杭州西湖湖中の孤山を指す。○**茂陵藁**　茂陵は地名。漢の武帝の陵墓のあるところ。ここでは晩年そこに暮らした漢の文学者、司馬相如を指す。藁は稿に同じ。原稿。ここでは司馬相如の「封禅書」を指す。ここの表現の裏には北宋の林逋の「寿堂の壁に書す」という詩の「茂陵 他日 遺稿を求むれば／猶お喜ぶ曾て封禅の書なきを」〔漢の司馬相如のように、死後、遺稿を求められても、幸い私には封禅の書のような天子のお祭りを褒め称える草稿なんぞ、これっぽっちもないのだ〕という詩句がある。つまり司馬相如のように権力にすり寄る姿勢は取らず、もっぱら隠遁の姿勢を貫いた林逋を、この「半月梅花を照らす」景色を描いた扇面を見ると思い出す、ということを言いたいのである。　○**涼水**　西湖を指す。また恐らく扇面に描かれていたであろう湖畔の様子も含むか。林逋の「梅花」其の一にも「水辺の籬落　忽ち横枝」とある。　○**風標**　風度。風采。雰囲気のあるすがた。品格。唐の鄭谷「左省張起居に寄す」に「風標　鷺鶴を欺き／才力　沙泉に湧く」。宋の文同「再び鷺鷥に贈る」に「湖上の水禽無数／其れ誰か汝が風標に似ん」。（因みに「風標公子」という言い方もあって、鷺のことを表す。杜牧の「晩晴の賦」に「白鷺潜かに来る／邈かなる風標の公子」とあるのに基づく）。　○**元祐枝**　元祐は北宋の年号（一〇八六～一〇九四）。「元祐の枝」とは林逋（九六七～一〇二八）の愛した梅の枝を指す。元祐の年号と林逋の生きた時代は実際にはズレがあるが、ここでは元祐という年号で林逋を表している。

《半月が梅花を照らしているさまを描いた扇面に題して》

たそがれ時の半月に、梅の枝がまばらに横に斜めに地に影を落として、やがて宵闇がおとずれようとする時、梅の花は臙脂にも似た美しさを見せている。

かの林和靖が隠れ住んだ西湖の孤山にある梅の枝に月が射して、まばらな枝の影が横に斜めに映るのを見れば（あるいは扇面の画の梅の枝が月の光に影を落とすのを見れば）、林和靖が「寿堂の壁に書す」という詩で示した「茂陵 他日 遺稿を求むれば／猶お喜ぶ曾て封禅の書なきを」〔漢の司馬相如のように、死後、遺稿を求められても、幸い私には封禅の書のような天子のお祭りを褒め称える草稿なんぞ、これっぽっちもないのだ〕という反俗の姿勢を思い出す。

冷たい湖の岸辺に立つ梅のいかにも品のある枝ぶりは、元祐の御世を生きた林和靖の詩に描かれた「疎影横斜　水清浅／暗香浮動　月黄昏」という梅の枝のすがたを髣髴とさせる。

【余説一】『史記』司馬相如伝に云う、「相如既に病んで免れ、茂陵に家居す。天子曰く、司馬相如病い甚だし。往きて従い悉く其の書を取る可し。若し然らずんば、後之を失わんと。所忠〔使者の姓名〕をして往かせ使む。而れども相如已に死して、家に書無し。其の妻に問うに、対えて曰く、…長卿〔司馬相如の字〕未だ死せざりし時、一巻の書を為りて曰く、使者の来りて書を求むる有れば、之を奏せ。他の書無しと。其の遺札、書して封禅の事を言う。」云々。「封禅」というのは、天子の中でも限られた優れた天子にだけ許される天地の神々を祭る大儀式で、泰山とそのふもとの梁父で挙行される。司馬相如の「封禅の書」はその挙行を天子に勧める内容で、それを北宋の林逋は権力にこびへつらうものとして皮肉っているのである。

「茂陵の藁」という句だけで林逋の「寿堂の壁に書す」の詩と、林逋の反俗隠遁の姿勢を連想させるこの詩の構成は、中国詩文の十分な教養を具えた（そしてこぞって林逋の梅の詩を愛した）五山の詩僧たちには共有の常識。しかし素人目には何を言いたいのか分からない、いささか衒学的な表現でもある。

それはそうとして、信玄は確かに、権力に擦り寄るような生き方は気に入らなかったのであろう。

【余説二】絶海中津が賛した墨梅図が残っている（正木美術館）。その賛「画梅に題す一首」に「孤山曾て訪う中庸子／水に照る梅花　処士の家／駅使は南国の信を伝えざるも／黄昏月に和して横斜を看る」。他にも没倫紹等筆「林和靖図」や物外筆「墨梅図」など梅を描いた画は多く、みな画賛が書かれている（詳しくは高橋範子著『水墨画にあそぶ　禅僧たちの風雅』〔二〇〇五年、吉川弘文館〕を参照）。

〔十六〕　**便面蘆間白鷺**

蘆葦清風垂頂絲
窺魚白鷺水生涯
江南記得曾遊夕
似見梨花院落時

便面　蘆間の白鷺

蘆葦の清風　頂絲を垂る
魚を窺う白鷺　水の生涯
江南　記し得たり　曾遊の夕べ
梨花院落の時を見るに似たり

▽七絶。上平声四支韻（絲・涯・時）。
△「頂絲」、尊経閣本、磯貝本作「項絲」。
「曾遊」、大泉寺本作「昔遊」。

○**蘆葦**　あし（あしのまだ穂が出ていないものを蘆といい、あしの十分成長したものを葦という）。常建「晦日馬鐙曲稍次中流」に「夜寒くして蘆葦に宿し／暁色西林に明らかなり」。　○**頂絲**　白鷺の頭上の白い冠羽。　○**曾遊**　以前おとずれたことがある。唐の于武陵「南游感有り」（『三体詩』巻三）に「重ねて曾遊の処に到れば／多くは旧主人に非ず」。　○**窺魚白鷺**　虎関師錬「行旅の所見」に「遥かに見る　白鷺魚を窺いて立てるを」。　○**梨花院落**　梨の白い花が中庭に咲く。北宋の晏殊「寓意」に「梨花院落　溶溶たる月／柳絮池塘　淡淡たる風」。

《葦の間に白鷺を描いた扇面に題して》

葦の広がる水辺、清らかな風が吹いて葦が揺れる。そこに俯いて立つ一羽のしらさぎ。白い冠羽が垂れている。きっと魚を待っているのだろう。その水に生きる暮らし。そんな夕暮れの景色が私の記憶に残っている、曾遊の地、江南の夕べ。その夕闇に浮かぶ白いすがたは、中庭に梨の花が咲いて、月明かりのもとで白くぼぉっと浮かんでいるかのようだ。

【余説】宵闇近づく葦間にたたずむ白鷺の姿を、宋の晏殊の「寓意」に描かれた「梨花院落　溶溶たる月」、溶溶として一面に広がる月の光の中で、中庭に咲いた白い梨の花のイメージとダブらせたところが詩の眼目。前詩の梅と同様、俗に交わらぬ孤高の姿を描いている。柳宗元の「江雪」に通うイメージ。

〔十七〕　**寄濃州僧**

気似岐陽九月寒
三冬六出洒朱欄
多情尚遇風流客
共対士峰吟雪看

濃州の僧に寄す

気は岐陽九月の寒きに似る
三冬　六出　朱欄に洒ぐ
多情　尚わくは風流の客に遇い
共に士峰に対して雪を吟じて看ん

▽七絶。上平声十四寒韻（寒・欄・看）。
△「岐陽」、尊経閣本、磯貝本作「歧陽」。

○**濃州**　美濃（岐阜）。　○**岐陽**　岐阜。　○**三冬**　三冬は冬の三ヶ月。孟冬、仲冬、季冬。　○**六出**　雪の異称。六花に同じ。雪の結晶の六角形なのによる。唐の元稹「春雪　早梅に映ずるを賦し得たり」に「飛び舞いて春雪に先んじ／因りて上番の梅に依る／一枝方に漸く秀で／六出已に同に開く」。五山の詩僧愚中周及〔一三二三～一四〇九〕の「乙亥の冬、雪に因りて西金の旧事を思う　其の二」に「六出の花光　水銀を奪い／人をして令地に早くも塵を超えしむ」。　○**洒朱欄**　洒は灑に同じ。そそぐ。朱欄は朱色の手すり。甲斐の国の躑躅ケ崎館の欄干を指す。　○**多情**　（口語的表現で）感謝する。～してくれるとありがたい（～してくれることはまことに情け多いことだ、という意味）。　○**尚**　こいねがわくは。　○**風流客**　風流を解する人。濃州の僧を指す。「風流」の用例については「〔九〕薔薇其の二」の注を参照。○**士峰**　富士山。

《美濃の僧に寄せる詩》

こちらの今の気温は岐阜の九月と大差ありませんが、冬ともなれば雪が降って館の朱欄に降りそそぎます。そこで冬になりましたなら、願わくは貴僧のような風流を解するお人にお出まし願えれば、まことにありがたい。ともに富士の峰に向かい、雪見の詩会など催して、のんびりと眺めたいものです。

【余説一】起句、承句のつながりがいまひとつはっきりしないが、この詩を美濃の僧に寄せた時期が晩秋九月で、やがて訪れる「三冬」すなわち冬の十月、十一月、十二月にはこちらは雪になる。そのころに詩会など催したいので、お出で願いたいということなのだろう。雪のことを「六出」というのは珍しい表現だが、注に記したように唐の元稹や五山の詩僧愚中周及の詩に用例が見える。

【余説二】この詩の「濃州僧」が誰氏であったかを、河住玄氏は『武田信玄の詩歌』（下）において検討し、美濃岩村の大円寺から招請された希庵玄密と、美濃の土岐氏の一族である快川紹喜の二人を候補に挙げ、年代の検討から希庵玄密ではなかったかと推察しておられる。

＊　＊　＊

巷間に信玄作として伝えられる漢詩がもう一首ある。「偶作」と題する詩である。後述のとおり問題が多いが、とりあえずここに並べておく。

〔補〕**偶作**

鏖殺江南十万兵
腰間一剣血猶腥
竪僧不識山川主
向我慇懃問姓名

偶作

鏖殺す　江南十万の兵
腰間の一剣　血猶お腥し
竪僧は識らず　山川の主
我に向かって慇懃に姓名を問う

▽七絶。下平声八庚韻（兵・名）。〔腥は下平声九青韻〕。

○**鏖殺**　みなごろしにする。「鏖」はみなごろしの意。　○**江南**　具体的にどこを指すか不明。諸説あるが詮索は無用。　○**竪僧**　竪は卑しい、小さい。竪僧は僧侶を侮蔑した呼び方。田舎坊主。小坊主。　○**山川主**　甲斐一国の領主。○**慇懃**　ていねいに。

《偶々作る》

江南十万の軍隊を皆殺しにし、腰の剣はまだ血に濡れて生臭い。田舎の坊主は藩主の俺を知らず、ばかていねいに「そこもとのご尊名は」などと問いおった。

【余説】信玄の漢詩として有名な「偶作」と題する詩。日本漢詩選のたぐいにもしばしば代表作として取り上げられている。しかし「機山十七首」には含まれていない。けだしそれが明の太祖朱元璋の詩を一部改作したものに過ぎず、機山詩集中に列するわけにはいかなかったからであろう。

ちなみに元になる太祖朱元璋の詩は次の如くである。

鏖殺江南百万兵
腰間宝剣血猶腥
山僧不知英雄漢
只恁嘵嘵問姓名

鏖殺す　江南百万の兵
腰間の宝剣　血猶お腥し
山僧は知らず　英雄漢
只恁に嘵嘵として姓名を問う

○鏖殺江南百万兵　太祖が長江中流域に勢力を張っていた陳友諒を破り、長江下流域を支配していた張士誠の呉政権を破ったことを指す。　○山僧　田舎の坊主。○英雄漢　漢は好漢。　○只恁　ひたすらに　○嘵嘵　おびえる声、おそれる声。

諸家の指摘するとおり、おそらく信玄が戦捷の宴などの場で、戯れに朱元璋の詩を借りて、己が威勢血気を示したものであろう。

石川忠久氏は「〈剽窃〉というより、ふだん愛唱していた詩を、少し整えて、甲州一帯を掌握した威勢を示すのに〈借用〉したというべきだろう。」とする（『日本人の漢詩』）。

また荻原留則氏は「朱元璋の詩をもじった一首のパロディーである」とし、さらに「豎僧不識」の「不識」は「識らず」ではなく、上杉謙信の法号「不識庵謙信」のことであるとし、「豎僧は不識…」と読んで、謙信へのからかいと見る（『改訂版 機山武田信玄公の漢詩（解説）』）。

腰原哲朗氏は信玄の和歌におけるパロディ化に言及して次のように指摘している。「著作権などといったものがなかった時代だから、どこでもおおらかに換骨奪胎をやってのけた。いかにたくみに翻案することかということが、まぎれもなく詩文の才能だったので、『千載和歌集』の一部を詞書と歌を合わせそっくり抜いてきたりしている（品第十）。『可笑記』（巻五）にもある有名な「人は城人は石垣人は堀情けは味方あだは敵なり」（品第三十九）にしても、他に類似した作があるのかもしれない。…こうした和歌は随所に出てくるのであるが、多くが戯れの歌、狂歌ばりのパロディ化した歌である。」（腰原哲朗訳『甲陽軍鑑』上〔一九七九年、教育社〕解説）。

こうした傾向から考えれば、この「偶作」も「戯れの」詩、「パロディ化した」詩であると言ってよいであろう。

＊　＊　＊

武田信玄の遺偈として、『甲陽軍鑑』巻十二（品第三十九）「十　信玄公逝去付御遺言之事」の条に次のような偈がみえる。

遺偈

大底還他肌骨好　　大底（たいてい）　他（か）の肌骨（きこつ）好きに還（かえ）さん
不塗紅粉自風流　　紅粉（こうふん）を塗（ぬ）らずして　自（おのず）ら風流（かふうりゅう）

遺偈

○**大底**　大抵に同じ。おおむね、すべて。白居易「暮れに立つ」に「大底四時心総て苦し／就中 腸を断つは是れ秋天」。○**還**　かえす、任す。　○**他**　口語の三人称代名詞。かれ、かの。　○**肌骨**　肌と骨。宋の歐陽脩「秋声の賦」に「其の気凛冽にして／人の肌骨を砭す」。また胸臆。心の奥深いところ。宋の曾鞏「歐陽学士に上する第二書」に「抑も実に以て心思に刻み肌骨に銘じて佩服矜式するを得」。　○**紅粉**　べにおしろい。唐の雍裕之「宮人斜」（『三体詩』巻一）に「幾多の紅粉　黄泥に委す／野鳥歌うが如く又た啼くに似たり」。○**風流**　「風流」の用例については「〔九〕薔薇其の二」の注を参照。

《遺偈》

おおむねすべては彼（か）の肌骨（こころ）好き連中に任せよう。べにおしろいをつけるようにあれこれ細工を加えずとも、もちまえの風流があるのだから。

【余説】『甲陽軍鑑』巻十二（品第三十九）「十　信玄公逝去付御遺言之事」の条に「〔天正元年（一五七三年）〕四月十一日未の刻より、信玄公、御気相悪御座候而、御脉殊ノ外はやく候。又十二日の夜亥ノ刻に、口中にはくさ出来、御は五ツ六ツぬけ、それより次第によはり給ふ。既ニ死脉うち申候につき、信玄公御分別あり。各譜代の侍大将衆、御一家にも人数を持給ふ人々、悉ク被召寄、信玄公被仰は、…」として、まず自らの戦さの仕方を他の諸将と比較しつつ振り返り、次いで家督相続のこと、葬儀のこと、死後勝頼が信長・家康・謙信に対して採るべき策などをこと細かに告げる。その後、「御目をふさぎ給ふが、又山縣三郎兵衛をめし、明日は其方旗をば瀬田にたて候へ、と仰せらるゝは、御心みだれて如此。然共、少有て、御目を開キ仰らるゝは、大底還他肌骨好、不塗紅粉自風流、とありて、御とし五十三歳にして、おしむべし、おしかるべし、あしたの露ときえさせ給ふ。」とある。遺偈は後は任せる、しっかりした連中がいるから大丈夫だ、というこころであろう。

TAKEDA SHINGEN（武田信玄）'s Chinese Poetry（漢詩）
Text, commentary and translation

SHIMAMORI Tetsuo

要　旨

武田信玄は漢詩を17首残している。本稿はその校訂、注釈、現代語訳である。これらの注釈作業を通じて、我々は武田信玄の中国文学とりわけ宋詩に対する該博な知識と、日本の五山文学からの影響・継承関係、そして日本の王朝文学の流れを汲む伝統的な花鳥風月の美意識を窺い知ることができる。

キーワード：TAKEDA SHINGEN（武田信玄）
Chinese Poetry（漢詩）
Poetry in Song Dynasty（宋詩）
Gozan Literature（五山文学）
Japanese classical sense of beauty（日本の伝統的な美意識）

（平成26年9月30日受理）